View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

「総合演習」の実践的研究

著者	中込 雄治，長友 大幸，生野 金三
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	9
ページ	91-104
発行年	2009-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000620/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

「総合演習」の実践的研究

The Research of General Seminar

中込雄治・長友大幸・生野金三
NAKAKOMI, Yuji NAGATOMO, Hiroyuki SHONO, Kinzo

Ⅰ　はじめに

教育職員養成審議会は、平成９年に「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」の第一次答申を発表した。その中の「教員に求められる資質能力と教職課程の役割」の項においては、今後特に教員に求められる資質能力の具体例として「地球的視野に立って行動するための資質能力」の必要性を指摘している。それをめぐっては、

> 人間尊重、人権尊重の精神はもとより、地球環境、異文化理解など人類に共通するテーマや少子・高齢化と福祉、家族のテーマについて、教員を志願する者の理解を深めその視野を広げるとともに、これら諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようにするため、「教職に関する科目」として新たに「総合演習」を設ける必要がある。(1)

としている。ここでは、教員に求められている資質能力との関わりより教職課程の教育内容に「総合演習」の新設を提言している。そして､「総合演習」の具体的方途として、人類共通のテーマや我が国社会の全体に関するテーマ等のうちいくつかについて選択的にテーマを設定した上で、ディスカッション等を中心に演習形式の授業を行うものとしている。その授業の方法をめぐっては、

> 実施の見学・参加や調査等を取り入れるなどして教員を志願する者が現実の社会の状況を適切に理解できるよう必要な工夫を凝らすことや幼児・児童・生徒への指導という観点から指導案や教材を試行的に作成したり模擬授業を実施すること(2)

と指摘する。ここにおいては、新設「総合演習」のあり様をめぐって、まず実地の見学・参加等の体験的学習を導入して、教師を志願する者の理解をより深めるような授業を組織することの重要性を指摘している。次いで、指導という観点から指導案の作成、模擬授業の実施等とあることより、発達段階に応じて如何に教えたらよいかについて教員を志願する者に自ら思索させるような授業を組織することの重要性を指摘している。前者においては、人類に共通するテーマ等について教員を志願する者の理解を深め、その視野を広げるために体験的活動を導入して主体的に課題を解決するという課題解決的能力を図る観点より授業方法を適切に工夫することを示唆して

キーワード：総合演習、実践的研究、指導法
Key words ：General Seminar, Practical Study, Teaching Methodology

いるといえよう。一方、後者においては､｢発達段階に応じて如何に教えたらよいか」ということより将来実践の場で柔軟に活用できる資質能力の育成を図る観点より実践的指導力の基礎を強固にする授業方法の抜本的な改革を図ることを示唆しているといえよう。

このような背景には、大学の教職課程の教育内容をめぐって、教員に対する社会的要請と教職課程の教育内容の実態との乖離、教科の専門性の過度の重視、教科指導をはじめとする教職の専門性の軽視、体系的な教育の欠如等の不十分な教育内容・方法等の問題点が指摘されているためである。

以上のことを踏まえ、本研究では「総合演習」のあり様を実践的に探ることを目的とする。就中、今回は人類に共通するテーマにつなげる端緒として「自国文化理解」や「日本の教育課題」等について教員を志願する者が理解を深め、その視野を広げることを志向し、**課題発見、課題探究、成果の整理・発表の様相等**を探り､それらに分析を加え､｢総合演習」のあり様を探ることにする。

Ⅱ 「総合演習」の実践展開

１ 課題探究過程の様相

「総合演習」においては、先に教員を志願する者の課題解決能力を育成することが重要であるとした。このような能力の育成に当たっては、まずその様相を受講者である学生に知らしめることである。以下に、その解説に用いた「課題発見」の場面､｢課題探究」の場面､｢成果の整理・発表」の場面等の資料を掲げ、それについて簡約する。

＜資料＞

１ 「課題発見」の場面
〔学習計画、構想メモ、ウェビングカード、ＫＪ法カード、学習方法、意見（教師）等〕
２ 「課題探究」の場面
〔取材カード、・観察カード、制作カード、評価カード、メモカード、意見（教師）等〕
３ 「成果の整理・発表」の場面
〔作品、小論文、新聞、紙芝居、ブックトーク、写真、学習指導案、反省カード、評価カード、意見（教師）等〕

＜解説＞

「課題発見」の場面について

ここでは、共通の課題（例えば、自国文化、教育、保育等）にしたがって個々人が探究する課題、つまり個人的関心事を整理する。その際重要なことは、この科目の趣旨に鑑み指導者は個々人の興味や関心を基盤に授業を展開することである。そして、個々人の主体的活動の展開が可能となるように支援していくことである。その方法としては普段の教科学習との関わりで課題を発見することである。個々人は、普段の教科の学習の折り、様々なことに気付いたり、疑問を抱いたり、興味や関心を持ったりする。斯様なことを起爆剤として発展課題を取り上げ、探究していくように誘っていくことである。その際、個々人の学びの様相を確り捉えさせながら課題意識をじっくり醸成していくことである。それに当たっては、課題発見を見出す契機となる情報収集活動、課題と関わる具体的体験、更には課題発見に寄与する情報の提供等を必要に応じて行っていくことである。斯様なことと並行して課題発見に具体的に着手していく。その方法としては、ウェビング法やＫＪ法（考

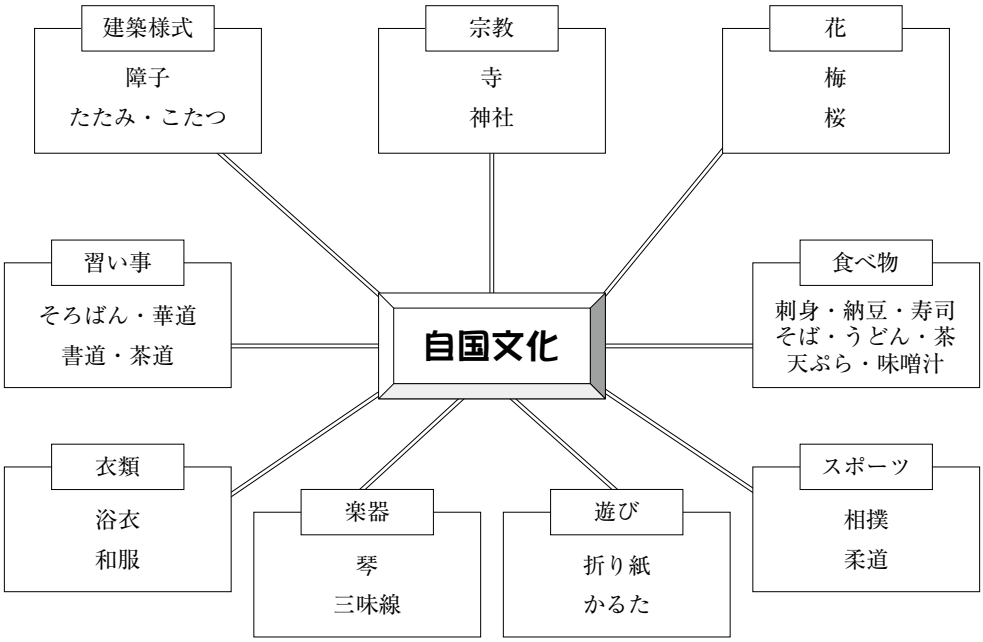


図１

案者川喜田二郎のイニシャル）等がある。個々人の探究課題として焦点化していく際には、とりわけ興味や関心のあること、問題としていること、必要なこと等は何であるかをリストアップしていくことである。そして、リストアップした内容は、自分にとって探究が可能か否か、価値が存在するか否か等も考えておくとよい。なお、「課題発見」場面の欄にいくつかの項目を掲げたが、常にこれらのことを念頭に置きながら課題発見に着手して欲しい。

図１のマッピングは、「自国文化」（課題）をめぐって、ＫＪ法によって整理した内容の一端（模造紙で掲げた内容）である。

課題発見の方法としては、ＫＪ法やウェビング法等があるとしたが、以下においてはＫＪ法によって課題を焦点化していく方法を掲げてみる。ＫＪ法は、ある課題に関する心の働きをカード化し、そのカードの内容の質を整理し、全体を構造化して把握する方法である。言わば、ボトムアップ的に整理する方法である。（ウェビング法は、課題に関する認識の広がりを想定しながら「くもの巣」のようにその内容を張り巡らせ、その図を基に課題を焦点化していく方法である。）

先に掲げたマッピングは、「自国文化」（課題）をめぐって、ＫＪ法によって整理した内容の一端である。その具体的手順は、概ね（１）（２）（３）の通りである。

（１）まず、受講者である学生の課題「自国文化」に関する心の働き（関心のあること、問題としていること、必要なこと等）を個々でカード（縦７cm×横15cm程度の）にマジックで記す。

（２）そして、それを予め黒板に貼付された「自国文化」（カード）の周りによく考えて貼付する。

（３）貼付後、皆で検討を加え、内容のまと

まり毎に見出しを付ける。

「課題探究」の場面について

ここでは、個々人で課題について探究し、そしてそれを整理する。まず、グループで発見した課題を如何なる方途で探究するかを検討する。その方法としてはいくつか認められる。例えば、副題毎に何人かに分担して探究する方法、一つの副題を中核に据えて探究する方法、あるいは同じ副題を選択した個々人を一つのグループとして探究する方法等が存在する。次いで、グループ毎に副題について調べたり、観察したり、製作したりする具体的な活動について話し合う。その際、探究の仕方を決定していくのであるが、ここで最も重要視しなければならないことは探究の方法を微に入り細を穿った探究計画である。図書館、資料館、公共施設、工場等のいずれの場所に出向いていくのか、課題を如何なる方法で探究するのか（カード化する・写真に納める・インタビューする・パンフレットを貰う等）、そしてそれをどう記録したり、整理したりするのか等を予め確り話し合っておくことである。就中、記録の仕方、整理の仕方等は具体的に検討しておくとよい。そうすることで、探究後の「成果の整理・発表」の場面で探究した内容は課題解決に寄与するであろう。先に探究する際、記録の作成や整理の仕方等は予め検討しておく必要があるとしたが、就中ここでは引用する場合、以下のことに留意しておく。まず、「引用」は個々人の考えを補説するのが目的であることを認識し、「引用」して論述することは、個々の考えを根拠付けたり、具体例を示したりする際文献より必要個所を抜き出して個々人の文章に取り入れてより分かり易くしたりすること等であることを確り捉えておく。斯様なことに鑑み、「引用」する際には原文を正確に引用すること、そして「引用」した部分と自分の考えとの関係を明確にすること（引用した文章に個々人で考察を加えること）、「引用」した文章等の出典を明記すること、「引用」した部分が適切な量になること等を十分留意する。

「成果の整理・発表」の場面について

ここでは、課題にしたがって探究した内容を整理し、発表する。まずは、探究過程を振り返ると同時に探究の成果やその価値付けを行い、次いで発表に向けての準備を行う。発表に当たっては、以下のようなことを念頭に置く必要があろう。探究活動で得られる知識や情報は多種多様に亘っている。ここで最も重要視しなければならないことは、多岐に亘るまとめ方の中で、研究の目的や内容との関わりで最も適切な方途を選択することである。就中、それは探究活動の様相が明確になり、且つ探究の成果が最も明確になるような方途である。その方途としては、概ね次の二者が考えられる。いずれの方途においても基本的には以下の項のもとに整理をしておくとよい。

（１）課題（テーマ）を選択した理由や動機
（２）探究活動の内容
（３）探究活動の成果とその価値付け（評価や反省も含む。⇒探究内容や探究の方法をめぐって）
（４）発表や模擬授業の方途

まず、一つ目は、研究報告書、紙芝居、新聞等を作成して、それを他者（学習者）に提示したり、説明をしたりする場合である。今一つは、（学習者を学び役として見立てて）模擬授業を行う立場より探究内容を整理する場合である。それに当たっては、まず模擬授業の対象を予め念頭に置いて、知らしめる内容（教材）を研究し、それを精選する。内容の構造化

を図ったらそれを基盤にして指導案を作成し、模擬授業の具体的準備に着手（教材や教具等の作成、発問計画の作成等）する。指導案の作成には課題探究が終了した段階で解説を加える。とりわけ、ここでは学習者にどんな目標（ねらい）のもとにどんな内容によってどんな環境を構成し、そこでどんな活動を組織し、そして如何なる支援を行うか、そうした展開の流れに沿って指導案を作成していく。総合演習をめぐっては、とりわけ後者の内容が重要視されている。それは総合演習の趣旨に指導という観点から指導案の作成、模擬授業の実施等とあり、発達段階に応じて如何に教えたらよいかについて教員（保育士）を志願する者に自ら思索させるような指導を組織することの重要性を指摘している故である。

以上は、課題研究の過程、つまり課題発見、課題探究、成果の整理・発表等のそれぞれの段階における特色である

2　実践例（課題発見をめぐって）

課題探究の過程について触れたが、これを踏まえて受講生である学生が、グループ毎に如何なる課題を発見したのか、その具体的様相を掲げる。

＜事例＞

【模造紙で掲げた内容】（図２）

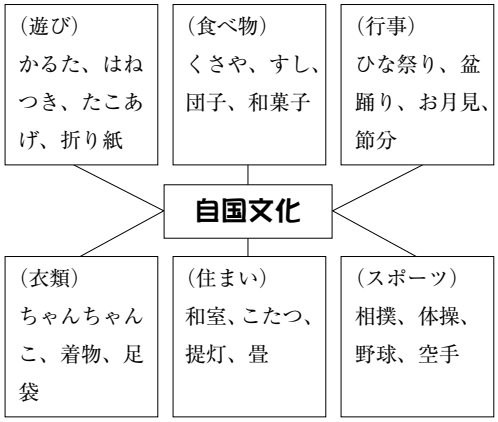


図２

【発表原稿】「自国文化」について

私たち人は「自国文化」について検討し、課題発見の成果をこのように模造紙にまとめました。

それでは、課題発見の過程を説明していきます。その方法として、私たちはＫＪ法を用いました。まず、一人一人が事前に「自国文化」についてまとめてきたのを基に、その中から5個ずつ選んでカードに書きました。次に、それらのカードを模造紙に並べ、まずグループに分けました。更に、皆でグループ分けの内容等はそれでよいかについて検討し、整理しました。そして、それぞれのグループに適切なタイトルを考え、このように遊び・食べ物・行事・衣類・住まい・スポーツという自国文化を取り巻く6つのグループを作成しました。

それでは、６つのグループについて説明をします。

遊び のグループでは、かるた･はねつき･たこあげ・折り紙が挙がりました。これらは、昔から遊ばれていたものです。今は見られない遊びもあります。

食べ物 のグループでは、くさや・すし・団子・和菓子が挙がりました。どれも日本人には好まれています。外国の人には理解できなかったり、口にあわなかったりするものもあります。

行事 のグループでは、ひな祭り･盆踊り･お月見・節分が挙がりました。日本人なら誰でも知っている伝統行事です。それぞれの由来を調べてみるのもおもしろいと思います。それぞれ行事には様々な決まりがあります。

衣類 のグループでは、ちゃんちゃんこ・着物・足袋が挙がりました。現在は普段このようなものを着たり履いたりする機会はない

です。でも、行事の際には、それらを着たり履いたりする姿が見られます。

住まい のグループでは、和室・こたつ・提灯･畳が挙がりました。最近は、洋風の建物が多くなり、和室は少なくなりました。でも、私達には従来の和の空間が落ち着きます。

スポーツ のグループでは、相撲・体操・野球・空手が挙がりました。相撲は国技と称され、ちゃんこ料理は有名です。体操は、かつて日本はオリンピックで良く団体優勝しました。野球（日本の）は今年世界一に輝きました。空手には様々な型があります。

以上私達が検討した「自国文化」についての課題発見の過程です。このようにまとめた様子を見てみますと、普段何気なく見ているものの中には多種多様の日本の文化が存在していることに気付きます。皆さんはどうだったでしょうか。そのイメージは必ずしも同じではなかったのかもしれません。このようにグループ作業を通して自国文化に対して多くの見方が存在することに気付きました。

最後に、日本の伝統･文化･歴史を理解し･そして｢和の心｣を大切にしていきたいと思っています。これで私たちの発表を終わります。

＜考察＞

課題発見の実践例を見てみると、共通の課題（自国文化）をめぐって個人的関心事を基盤に如何に探究課題を整理していったかその過程に触れている。とりわけ、ここではそれぞれ検討した内容を模造紙に整理し、それを基に課題発見に至るまでの流れを述べている。斯様な全体の共通テーマ（自国文化）のもとにグループで如何にそれを焦点化していくかという課題発見の過程を受講者である学生に体得せしめることは、教員（保育士）に求められている資質能力を育成する観点より見ても極めて重要なことである。また、このことは教育職員養成審議会等において強調している発達段階に応じて如何に教えていくかを教員（保育士）を志望の者に自ら思索させる授業を組織するという点より見ても重要視される内容である。

Ⅲ　本学における「総合演習」の実践

ここから、実際に本学人間学部幼児発達学科２年生を対象にして、2009年春期に行われた「総合演習」の授業における2クラスでの実践を紹介し、そこから得られた知見を述べる。

＜実践例その１＞

（１）興味・関心から学習テーマを考える

総合演習では、３～４人のグループで課題を設定し、お互いが協力して課題解決していく。共通した興味のある課題を設定していくことがよりよい学習を行うことにつながるものと考えられる。そこで、まず担当した11名の興味を知るために、11名に対して１人７枚ずつ付箋を配布した。そして、その付箋に各自が興味を持ち追究してみたい教育に係わる項目を書かせた。各自に書かせて得られた項目は表-1の通りであり、１人当たり３～７項目あげられた。

次に、興味の幅を絞り込むため、付箋に書かれた項目を持ち寄り、同一のもの、傾向が類似したものを集め、KJ法によりグループ分けを行った。その結果、11名より出された項目（表- １）は、教育、異文化、虐待、日本の文化、少子高齢、環境の５つのテーマにグループ分けされた。そして、それぞれどのグループに属したいかの希望をとった結果、３つのグループ（３、４、４人）に分かれることとなった。なお、グループのテーマは、教

育、異文化、虐待であった。

（2）学習テーマから課題を設定する

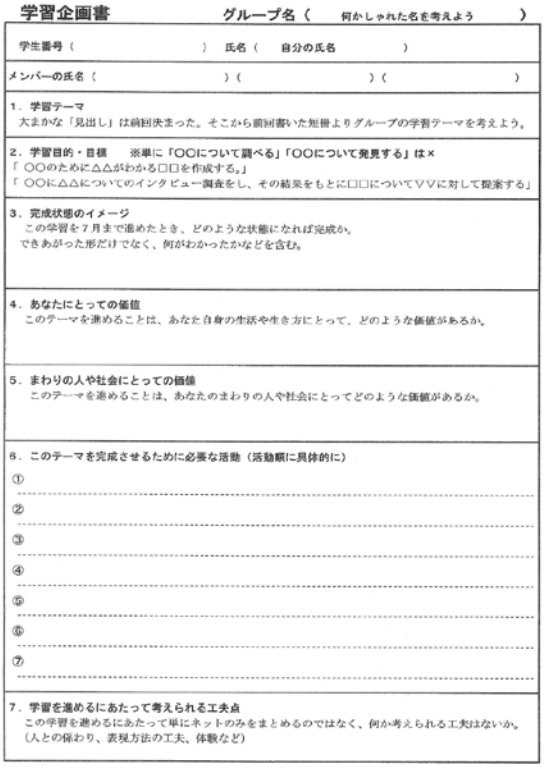
各自が興味のある学習テーマをもつグループに属することができたが、追究すべき方向が多岐にわたっていると、限られた授業数で課題解決することは困難となる。そこで、各グループのテーマからより具体的に課題を設定するため話し合い活動を行い、最終的な課題を設定した。設定された課題は､「スウェーデンの食育＆文化＆教育」「なぜ虐待をするのか～虐待の背景にせまる～」「いじめ問題」の３つであった。

（3）計画表を作成する

課題が決定した後、目的意識や方向性がはっきりしないうちに調査を開始するのではなく、計画性を持って学習を進めていくため、図３のような計画表を作成させた。そして、実際に設定した課題を解決することは可能か、調査した結果は自分たち以外の第三者にどう役立つのか、どういう調査項目を設定する必要があるか、最終的な完成イメージはどうか等を、明確にしてから行わせることとした。その際、単にインターネットに頼るのではなく、独自の調査（アンケート、ヒアリング等）を行うように助言した。学生は話し合い活動を通じて調査の方向性を定め、資料収集を開始した。

表－１　興味を持ち追求してみたい教育に係わる項目

学生氏名	興味・関心のある項目						
A	外国と日本の保育方針の違い	ベビーシッターのこと	スウェーデンと日本の違い	海外の学校	学校課題		
B	伝統文化（日本）	歴史	行事	スポーツ	四季	集団生活による効果	
C	いじめ問題について	地球温暖化	ネグレクト	ゆとり教育	人権について	今と昔の教育の違いについて	
D	地球温暖化	人種差別	昔と今の家庭の違い				
E	CO_2削減	老人ホーム	世界の虐待への対応	外国の保育のやり方	モンスターペアレンツの恐怖		
F	酸性雨	オゾン層	少子化	虐待	砂漠化	異文化問題	温暖化
G	CO_2削減	オゾン層破壊	リサイクル	七夕の歴史	花見の歴史	相撲の歴史	ダイオキシン
H	大気汚染	少子化	虐待	学力低下	高齢化	日本の文化	異文化交流
I	ネグレクト	現代の子どもの問題	虐待	ゆとり教育	環境問題	ゴミ問題	
J	温暖化	少子化	ＤＶ	異文化	大気汚染		
K	子どもの虐待で多いもの	ネグレクト	異文化保育	スウェーデンの方の保育	ゆとり教育		



学習企画書　グループ名（　何かしゃれた名を考えよう　）

学生番号（　　）　氏名（　自分の氏名　　）

メンバーの氏名（　　）（　　）（　　）

1．学習テーマ
大まかな「見出し」は前回決まった。そこから前回書いた短冊よりグループの学習テーマを考えよう。

2．学習目的・目標　※単に「○○について調べる」「○○について発見する」は×
「○○のために△△がわかる□□を作成する。」
「○○に△△についてのインタビュー調査をし、その結果をもとに□□について▽▽に対して提案する」

3．完成状態のイメージ
この学習を７月まで進めたとき、どのような状態になれば完成か。
できあがった形だけでなく、何がわかったかなどを含む。

4．あなたにとっての価値
このテーマを進めることは、あなた自身の生活や生き方にとって、どのような価値があるか。

5．まわりの人や社会にとっての価値
このテーマを進めることは、あなたのまわりの人や社会にとってどのような価値があるか。

6．このテーマを完成させるために必要な活動（活動順に具体的に）
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦

7．学習を進めるにあたって考えられる工夫点
この学習を進めるにあたって単にネットのみをまとめるのではなく、何か考えられる工夫はないか。
（人との保わり、表現方法の工夫、体験など）

図３

調査報告書　平成　年　月　日

（班員）

（テーマ）

（調査内容）誰がどこでどのような調査をしたのか、わかったことは何か具体的に書く。

次回学習計画書

（次回の調査場所）誰がどこで調査するのか、個々に書く。

（次回の学習計画）誰が何をどのようにして調べるか具体的に書く。

（用意すべきもの）新たに必要と思われる物があれば、その物品名を書く。

図４

（４）各回の見通しと成果を明確にする

計画を立てても、学習が進むにつれて軌道修正を余儀なくされる場合がある。そこで、計画表に加え、各回の調査の見通しを持たせ、得られた成果をしっかりと記録させることとした（図４）。その結果、各回の調査が行き当たりの活動とならず、また、各回の授業毎に作成した記録が、最終的な調査結果のまとめの際に大きく役立つこととなった。

（５）結果の整理をする

調査結果が得られ、その整理に当たってはいきなり模造紙に書きはじめるのではなく、A4紙に完成のイメージを書かせ、それを拡大修正する形で模造紙に書いていった。その際には、色の使い方や折り紙、色画用紙などを用いて工夫し、第三者が見ても見やすく、内容が伝わりやすくするよう心がけさせた。また、模造紙の作成と同時に、より広く調査結果を周知させるために、内容を簡潔に示した発表要旨を作成し、発表会当日に参会者に配布し、発表を行うこととした。図5には発表要旨を作成する際に配布した発表要旨作成マニュアルを示す。

（６）発表に評価をつける

発表に対して、単に聞いているだけではなく、より集中力を持って聞き、発表内容が理解できるように、発表要旨を作成させるとともに発表に対しての相互評価を行うこととした。図６には評価表を示している。評価項目は「発表時の態度や声の大きさ」、「説明がよくわかった」、「発表内容から感じる今までの努力の様子」、「発表要旨のできばえ」、「総合評

総合演習発表要旨

（発表題目）
自分たちのテーマを書く。

（発表者氏名）
先頭に代表者。あとは並べて書く。必ず氏名でかくこと。

（発表要旨）

１．目的

ここでは、今回テーマのような研究を行おうと思った理由、やることの目的を書きます。またやることによって、どのような役に立つかを述べます。この項目の行数は、グループによって異なるので任せます。

２．研究の方法

ここでは、自分たちの研究をどのようにやったかを書きます。どこでやったのか。何をやったのか。どのようなものを用いてやったのか。どのくらいやったのか。等といったことを工夫して書きます。研究方法の行数も、グループにより異なるので任せます。

３．結果

現在までにわかったことをまとめ、そこからどんなことが言えるのか、あるいは、こんなことがわかったなど、データを図や表にまとめて示しながら、書いていきます。この部分は、要旨の中心となるので、ボリュームたっぷりと書いてください。なお、結果の行数も、グループで異なるので任せます。

４．まとめ・考察

３で言ったことをもう一度述べながら、今までのまとめを書き、そこからこの研究がどのよう２ページ目に「まとめ・考察」の文章が入ってもかまいませんなことに役立つかなどといった応用の可能性について書くとよい。

写真や表、グラフなどを２ページ目に載せ、まんべんなく書くようにしてください。発表をしますが、この要旨を見ただけでもよくわかるくらいのものにしてください。

※行数は任せますが、上の方に少し書いて終わることがないようにしてください。この中で詳しくまとめて書いてください。字の大きさについては、小さくなりすぎず、大きくなるすぎず、丁寧に書くようにしてください。他の人達が目にするので、気をつけてください。

※この要旨を印刷したものをみんなに配って発表を行います。提出は班で１枚になります。

※字が雑でよくわからない場合、書き直してもらうことになるので、細心の注意を払って書くようにしてください。

※当日（７／14）の発表は各班10～15分くらいを発表時間とします。各班の発表に対して必ず１人１回は質問すること。

※この用紙の提出は、発表の１週前（７／８）とします。

図５

価」であり、その他「よかった点、アドバイス、気がついたこと」については自由記述とした。聞く側の学生は集中して聞き、評価表についてもしっかりと記述することができていたように思う。

＜実践例その２＞

（１）探究する手法に重点をおいた「総合演習」の授業実践

何を探究するかということと同時に、どのように探究するかということも、課題解決能力の向上を図る上で大事なポイントとなる。ここでは探究する手法に重点をおいた「総合演習」の授業実践について述べる。授業は10名の学生を対象にして、「日本における教育の課題」をテーマとして行われた。授業の大まかな流れは、「課題選択」→「課題探究（実態把握・問題点の分析・対策の検討）」→「プレゼン」である。時間的な制約から、残念ながら指導案の作成や模擬授業まではできなかった。学生が自らの興味関心にもとづいて選んだのは、「児童虐待」「ひきこもり」「いじめ」の３つの課題であった。課題探究は、それぞれの課題を担当するグループに分かれて進められた。授業では探究するときの手法を意識化できるように心掛けた。手法を意識化する場面は次の通りである。

「課題選択」の場面から

①　まず「日本における教育の課題」として思い当たるものを1人10個ずつ挙げさせた。それらをどのように分類するか、学生達は討議の結果、「学校」と「家庭」という上位概念のもとに図7のように分類した。カッコ内の数字はその課題を挙げた人数である。

　このように分類した図をかくことによって、この授業をとっている10人の学生集団の関心がどのようなところにあるのかを知ることができる。分類の仕方に関しては、上位概念を「子ども」「教師」「親」とする案も討議の過程で出されていた。分類する観点の違いによって様々な上位概念が考えられる。例えば図7のように「学校」「家庭」という「場所」で分類するか、あるいは討議の過程で出たように「子ども」「教師」「親」という「人」で分類するかなどの違いによって、作成される図も異なってくる。つまり挙げられた課題の関連付けの有り様も変わってくるわけである。このことから、ある課題と関連した別の課題を探すときには、上位概念を変更して考えるという手法が有効であることが押さえられ、アプローチの仕方の多様性を知ることができる。

②　続いて学生に個々の興味関心に沿って課題を選択させた。その結果、「児童虐待」（３人）、「ひきこもり」（３人）、「いじめ」（４人）を選択した３グループができた。ここでは学生が主体的に自らの課題を選択しているということが大事なポイントである。主体的な選択がその後の積極的な探究活動へとつながる。

　例えば「いじめ」を選択したグループは途中で「何でこんな難しい課題を選んでしまったのだろう」とぼやきながらも、自ら選んだ課題であるが故に積極的に取り組もうとする姿勢がうかがえた。

「課題探究（実態把握・問題点の分析・対策の検討）」の場面から

①　ここではまず課題となる文言の定義を確認させ、探究対象に対する共通理解を図るようにした。言葉の定義に対する共通理解が損なわれると、議論が噛み合わず建設的な討論ができないということを押さえた。

②　もし初めから課題に対する具体的な問題

「総合演習」発表会評価表

班員名	発表テーマ	声の大きさ 発表の時の態度や	説明がよくわかった	今までの努力の様子 発表内容から感じる	発表要旨のできばえ	総合評価	よかった点 アドバイス 気がついたこと
4名	スウェーデンの食育＆文化＆教育	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	
4名	なぜ虐待をするのか ～虐待の背景にせまる～	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	
3名	いじめ問題	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	A・B・C・D	

図 6

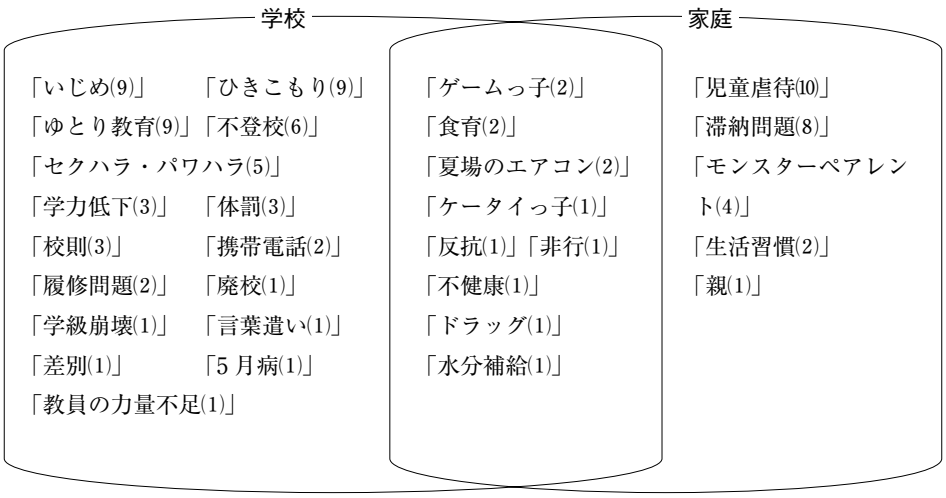


図 7

意識を持っているならば、そこに照準を定めた調査・分析を行えばよい。しかし今回の場合は、課題に対する漠然とした問題意識が学生達の出発点であった。そこでまず実態を調査するところからはじめた。このときの手法として、いくつかの具体的な事例に着目し、それをぐっと掘り下げて調べることにより、その課題自体に潜む問題点の核心に迫っていくという手法を押さえた。特殊な事例を深めることによって普遍的な何ものかをつかみ取るという帰納的な手法である。

例えば「児童虐待」を選んだグループは2つの事例を細かく調べ追跡することによって課題の核心に迫ろうとしていた。

③ 「児童虐待」「ひきこもり」「いじめ」等の課題における現状の調査から得る実態把握は、それだけでも大変重たい内容となる。そこでこの実態把握の時点で一定の達成感や満足感を得てしまい、その後の「プレゼン」ではともするとただ調べたことをそのまま紹介するという域にとどまりかねないことが懸念される。しかし探究した内容をもとに指導案を作成し、それを教育の現場で活かすことまで見据えると、課題をさらにもう一歩深いところで捉えさせる必要がある。そこでここでは課題の持つ問題点に対する解決や改善に目を向けさせ、学生が自分達なりの対策案を検討するという視点を組み込むようにした。対策案を検討する際には、どういう立場で課題にかかわろうとしているかという点を意識させ、学生自身が課題を自分自身の問題として深く考察することができるように工夫した。特に授業では、この対策案を検討することに十分な時間がとれるように配慮した。

例えば「児童虐待」を選んだグループでは常に「保育士という立場」でかかわろうという姿勢を明確にしていた。また「いじめ」を選んだグループでは「若い自分達だからこそ見えるものを活かそうとする視点」を確立していた。（後述の【レポートからの抜粋１】【レポートからの抜粋４】参照。）

④ 課題の問題点を分析する際には、まずその問題点に対する自分なりの考えを持つように心掛けさせ、それを対峙させながら文献等の見解を確認していくように促した。自分の考えを文献等の見解と対比させることによって、他人の意見を無批判に受け入れることを防ぎ、ものごとに対する深い理解につなげることができる。そのことを意識化することが大事なポイントになる。（後述の【レポートからの抜粋２】参照。）

「プレゼンテーション」の場面から

① 今回はパワーポイントを使って発表することにした。時間的な制約からパソコンでの入力は行わず、発表する内容を紙に書き、それをスキャナーで読み込み、パワーポイントのスライド画面に貼り付けてプロジェクターで映し出すという手法を用いた。今回はパソコンを用いてのプレゼンであったが、例えばパワーポイントのファイルをJPG形式に変換してデジカメに保存すれば、デジカメをプロジェクターにつなぐだけでプレゼンができる。こうした用法を知らせておくことも有益である。

② 各グループによるプレゼンの後には全体での討論の時間を十分に保障した。質疑応答も含めて学生同士の討論を深めることでプレゼンをより充実したものにできることを知らせた。またそれぞれのプレゼンに対

する学生達による評価も行った。相手の良い点悪い点を客観的に評価できる能力の育成も大切であることを伝えた。その後、各グループごとに活動した内容をまとめさせた。(後述の【レポートからの抜粋３】参照。)

（２）学生の反応

春期授業の最後に「総合演習（春期）における学習活動を通して学んだこと」というテーマでレポートを課した。以下はそのレポートからの抜粋である。手法を意識化した指導に対する一定の効果がうかがえる。

【レポートからの抜粋１】（「児童虐待」を選択したグループの学生）

私は今回、この虐待というテーマで色々深く調べてみたけれど、すごく深刻な問題の一つだと思ったし、自分が保育者になったという立場で考えてみると、もっと深く色々なことを知っていかなければいけないと感じました。実際に虐待を受けている子どもと出会ったら、とか保護者から育児の相談を受けたら、などと考えてみると、すごく身近な問題に感じたので、もっと具体的に対処法やサポートしていくようなことを考えていかないと、全然駄目だと思いました。もっと色々な知識を身につけておくべきです。自分が保育士になったとして、一度は経験するかもしれないので他人事のように考えてはいけないと実感しました。

【レポートからの抜粋２】（「ひきこもり」を選択したグループの学生）

ひきこもりに対する最初のイメージは、「いじめられていた」「オタク」「ねくら」などであった。しかし調べていくうちに、「精神疾患の可能性がある」「オタクは1割程度である」ということがわかってきた。今まで持っていたイメージとは異なるひきこもり像が垣間見えた。

【レポートからの抜粋３】（「ひきこもり」を選択したグループの学生）

授業を通してひきこもりを調べ、ひきこもりの知識を得た。しかし、総合演習で学んだものはそれだけではない。総合演習で学んだものは、調べるにあたっての視点、発表の手法である。これは、知識ではなく経験であり、最も大きい成果である。また、発表を行うにあたり、発表は発表者だけでなく聞いている方も参加していくことで、発表そのものの質が上がり有意義な時間になる。自分が疑問に思ったこと、気になった点を質問することで、発表者がどれだけ理解しているかがわかり、自分の理解度も上がる。経験はどんな知識にも勝る。大学生活の中でこういった授業があるのは有意義であると思った。

【レポートからの抜粋４】（「いじめ」を選択したグループの学生）

私は今回の活動を通して「ものの見方」について知ることができたのではないかと思う。厚労省などの偉い人達や大人の考えるいじめと、今実際に起こっているいじめとの間には、少なからずズレがあり、私達

は現状の真っただ中にいる。だから当然、見え方も違うのである。私達から見える部分、見えない部分があり、大人たちからも見える部分、見えない部分がある。世代が違うと、ものの考え方が違ってくるのだということを改めて思った。だからその違いを活かして、私達がオリジナルに、いじめ問題の課題に対する考えを見出そうとしたのだが、はっきりと明確に表すことができなかったように思える。終わってみると、もっと時間を有効的に使って、きちんと進めていって、しっかりと発表したかったという気持ちが大きい。

（３）実践例その2のまとめ

学生のレポート（【レポートからの抜粋３】）にも見られるように、小中高を通してこうした探究する手法自体を意識化することに、これまであまり重点が置かれて来なかったといえる。そうした経緯からも、「総合演習」の授業において探究の手法を指導内容に組み込むことに意義があると捉えている。今回はできなかったが、指導案の作成や模擬授業においても、こうした手法を指導内容に組み込むという観点が学生の側に培われていれば、さらに質の高い実践的指導力の向上が望めるであろうと思われる。

Ⅳ　おわりに

本稿では「総合演習」という科目のねらい等を概観し、その授業のあり方に対する実践的な模索を試みた。課題発見にかかわる方法として、ＫＪ法を実践例を通して確認した。本学における授業の「実践例その１」では、課題解決能力向上へ向けた工夫として、「調査報告書」「次回学習計画書」「発表要旨作成マニュアル」「発表会評価表」等の活用を示した。また「実践例その２」の探究する手法に重点をおいた授業実践では，そうした手法の意識化が重要であることを示した。

今後は、ここで示した工夫や手法の意識化を指導案の作成や模擬授業の中にどのように活用させていくかを課題として、「総合演習」の実践的研究を進めていきたいと考えている。

（なお、本研究は平成21年度共同研究費助成による研究課題「総合演習のあり様の探究」の一環である。）

［注］

（１）日本教職員組合『教育評論』編集委員会（『教育評論　通巻60号５』所収）p.35

（２）同上書　p.35